
自伝僕のノルウェイの森（大学時代バンドの思い出）

村上サガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自伝僕のノルウェイの森（大学時代バンドの思い出）

【Nコード】

N0534N

【作者名】

村上サガン

【あらすじ】

僕は進学する^{トオル}ために上京して、

最初に住んだのが、

小説ノルウェイの森の世界だった。

そうあの和敬塾だ。

僕は何度もホタルを見た。

早稲田大学のクラブはアラブゲリラで逃走中だった。

僕はロックバンドのクラブに入部した。

早稲田大学のクラブはアラブゲリラ（2011-5-2）

18歳で福岡県から上京した。

早稲田大学に進学するためだ。

東京にあこがれを抱いた。

テレビドラマ「台風とざくろ」に出てきた

フーテン、サイケ、裾がラッパのジーンズ、ロンドンブーツ、長髪

そしてピース。

ヒッピーが日本で多く住む場所、東京。

半年だが和敬塾の近くの学生寮に住んだ。

村上春樹さんが実際に住んで、

「ノルウェイの森」の舞台になった場所だ。

東京には親戚も親しい友人もいなかった。

不動産屋で洋室の部屋を探し、

最終的に恵比寿と目白の物件に絞込んで

悩んだ結果、目白の関口台に決めた。

理由は大学まで歩いて行けるからだ。

三階建てのできたばかりの白いアパートで

一階から二階は大家の住宅となっていた。

大家は隣接する医大付属高校の生徒で埋めたかったが
埋まらず、大学生を受け入れたと言っていた。

借りた部屋は三階の八畳洋間で

窓を開けると、カテドラル大聖堂や

目白通りを隔てて椿山荘が見えた。

学生生活は自炊といっしょに始まった、洗濯は屋上に共同の洗濯機があり屋上に干した。屋上の景色は森と高速道路が交互に並んでいて渋滞している車が同じ位置に見えた。

毎朝教会の鐘で目をさまし、朝は簡単にフランスパンとスクランブルエッグで済ませた。たまにガーリックトーストにすることもあった。

目白通りを渡り、和敬塾のある路地にはいり、古びた洋館をみながら、胸付坂という急坂を下りて、松尾芭蕉庵を左に見ながら神田川を渡り大学へ通った。

昼食は好物のカレーライスを大隈講堂近くの学食で食べた。その頃100円だった。早稲田はマンモス大学だから学食だけでもいくつがある。おそらく5つあったと記憶する。

帰りは夜が多く

胸付坂は街灯も少なく人気がなくて

不気味な場所となる。

夏にはホタルが飛んできた。

まるで妖精のように思えた。

椿山荘のホタル祭りで放たれるものが迷子になったものだ。

大学でのクラブは

映画研究会とロックバンド部に決めていた。

高校は音楽関係のクラブにいた。

まずは映研の部室へ向かった。

大学でもらったクラブの地図を見ながら部室を探した。
高校には映画クラブがなくて、あこがれていた。

部室に行くともドアに張り紙がしてあった。

「だいたいま闘争中！」

その横に「逃走中」とイタズラ書きされていた。
部室のドアは閉まっていた。

後に週刊誌で知るが、

クラブのメンバーは過激派（赤軍派？）で中近東へ逃走していた。
映画制作を現地で行っているらしい。

一年早く生まれていたら巻き込まれていただろう。

それで「シネマ研究会」に入った。

有名な女優や映画関係者を輩出するクラブに成長するのは
後年のことだ。

翌日ロックバンドクラブの部室へ向かった。

文学部がある大学エリアに音楽関係が集まる部室棟があった。

ハイソ（ハイソサエティーオーケストラ）や

その他歴史のある音楽クラブの部室が並んでいて

ナレオを見学した。

大学で唯一公認のロック系クラブだったと思う。

ナレオは昔ハワイアンのバンドだったがロックバンドとなっていた。

各部室に防音設備がほどこされて、

ぶ厚いドアを開けると騒音が外へ飛び出してくる。

ナレオはブラス（管楽器）とロックバンドの編成だった。

部室に初めて行った時、

二軍が練習していた。

曲はライトハウスの「One Fine Morning」だった。

ブルスがからむ軽快な曲だ。

2軍の練習の後に、3軍つまり新人の演奏時間になった。もうメンバーはそろっていて

その中でリーダー格のサク스가僕ら見学者に言った。

シカゴの「サタデイ・イン・ザ・パーク」をやりたい、

管はそろっているが、ピアノを弾くのがいないと。

誰も手をあげないので飛び入り参加した。

これがナレオとの最初の出会いだ。

ナレオの1軍メンバーは

TBSのテレビ番組「銀座ナウ」で

火曜日の素人コンテストの演奏を務めていた。

入部後はTBSへのバンドボーイ（楽器類運び）が仕事だった。

ピアノやアンプなどを運んだ。

番組開始までは放送関係者が忙しく働いていた。

一軍のリーダーに、調弦のために

ピアノでキーがほしいと呼ばれた。

調弦が終わったあとに時間があつたので、

BGMが必要だと思い。

ピアノで「ある愛の詩」を弾いた。

司会のせんださんが来ていて

「おお、ラブストーリーですね。和みますね」と言った。

低姿勢で優しそうな方だと思った。

仕事では、有名な歌手を舞台裏から見る事ができた。

帰りのトラックに乗ると、

芸能人と間違えられて、おっかけに追いかけられたものだ。

大学は学生運動で荒れていた。

入学式は学校でできずに箱根のホテルで行われた。

僕たちの世代は無気力・無関心・無責任の三無主義だと言われた。団塊の世代とはまったく違ったニュータイプだった。

その後ずっと団塊の世代組には違和感を覚え天敵となった。

直下の僕らは団塊の世代のライバルにならざるえない。

これはサラリーマンになっても続いた。

宿命のようだ。

10歳下はかわいがるが、数歳下ははじきだす競争の世界。

団塊の世代は競争社会の申し子で、

仲間意識の強さ、排除することの出際よさ、

頭もよく、ガッツがあつて、パワーには負けてしまう。

僕らの世代はがむしゃらに働くことを嫌う、

アクセクという言葉が大嫌いな世代だった。

大学で突然起こる内ゲバ。

キャンパスは流血、投石、鉄パイプの殴打による戦場だった。

セクト抗争で学生同士がキャンパスで追いかっこがはじめる、

捕まると鉄パイプで数名が一人を半死に近くなるまで殴打される。

学生運動は他人事のように思えた。

念仏のように唱えるアジテーション。

可愛い女性がヘルメットをかぶりバリケードを張り、

学校側と対抗しているのが哀れに思えた。

試験が中止されレポート郵送だけで済んだ時代だった。

なぜ僕らの世代にはマルクスとかレーニンとかの思想が浸透しなかったのだろう。

思うに最初に影響を受けるだろう小学二三年の頃、影響を与えたのはテレビだった。

テレビで流れるのは共産主義とか革命とかでなくて、
飛び込んできたのはアメリカ。

アメリカのホームドラマだった。

大きな冷蔵庫、庭にはプールがあって、

二階から階段を下りてくるエンジョイライフ……。

「パティーデュークショー」という青春恋愛ドラマや

SFの元祖「トワイライトゾーン」などに夢中になった。

夢のような生活をしている様子は

物覚えつくところから自然に刷り込まれていった。

丘上の馬鹿（2011-11-6）

親からの仕送りでは足りなかった。

都会に住みたかったので仕送りのお金は家賃で飛んでいった。

田舎ものだ、テレビの宣伝で

「駅ソバ、丸井」というので、
蕎麦屋が宣伝していると思った。

都会にあこがれて上京したのに、
都会を離れるなんてありえないことだった。

歌『神田川』のような生活も考えられない、
住居にはこだわった。

バイトをしようと思った。

ピアノの弾き語りができる店を探し歩いた。

部屋にはピアノがないので弾けなくなっている。
不安感がつきまどった。

当時はピアノスナックの店が流行で、
カラオケなどなく、

ピアノの演奏で歌っていた。

六本木に行った。

六本木はまだ有名ではなく、
原宿さえも有名でなかった時代だ。

繁華街としては銀座、新宿、渋谷が目立っていた。

六本木ならば地味なピアノスナック（ピアノバー）がある、
繁華街のピアノバーでは見習いを雇ってくれないだろう。

六本木の「パブカージナル」の裏にある「優」というピアノバーを
みつけた。

店には豪華なグランドピアノが置いてあるのだが、
弾き手がいなくてさみしそうにしていた。

客はボックス席に数名がすわっていただけで、さみしい店だった。
カウンターにすわってお酒を注文して、マスターと世間話をした。

「そうか、君は福岡から上京したのか。俺は長崎出身だ」とマスタ
ーが言った。

おそらく30歳代だろう、雇われマスターだったと思う。

「あのピアノ、誰か弾くんですか？」と尋ねた。

「いや、以前はピアニストがいたが、今はいない。客がたまに弾い
ているよ」

「それじゃ、僕が弾いて良いですか？」

弾いていいと言うので、自分の得意な曲を弾いた。

『マーサ・マイ・ディア』、『ヒア ゼア アンド エブリウェア』
などの

ビートルズの曲を弾き語りして、

ちょっと小休止がてらにDのコードをシンプルに繰り返して弾いた。

さあ歌おうかと思っていたら、

ボックスにすわっていた客のひとりの男が立ち上がって近づいてきた。

「それ『フルオンザヒル（丘の上の馬鹿）』だろ？」

「わかりますか？」と嬉しくなって答えた。

「俺歌うよ。いいだろう」と客が言った。

丘の上の馬鹿は太陽が沈んでいくのを見ながらも、頭の中には世界がぐるぐる回っているのが映っている。男は上機嫌になって、何曲かビートルズナンバーを歌った。

歌が終わって、客のすわっているボックスに招かれて親しく飲んだ。

二人は初老風でテレビ関係の仕事をしていた。

ビートルズの話で盛り上がった。

ジョンとポールについて語った。

二人は母についてトラウマがある。

ジョンは幼い頃に母に捨てられた。

ポールは生まれたときに母はいなかった。

喪失感がサウンドの源泉になっている。

客が帰ると店はしーんと静まりかえり、

カウンターに戻って、

マスターと閉店まで話し込んだ。

「今日は俺の家に泊まれよ。もう電車もないだろう」とマスターが言った。

タクシーで牛込町にあるマンションへ泊まった。

おそらく夜中の2時は過ぎていただろう。
毛布を借りてソファで寝ることにした。

夜明けごろだ。

下半身の異常で目をさました。

マスターの指が何か作業をしている。

やめろって、心で叫んでいるが声にならない。

電車の中でイタズラされる女性が黙っている気持ちが理解できた。

何か鳥肌が立ってきて、黙って手をふりほどいた。

マスターが言った。

「ごめんよ。俺って女性も好きだが、男にも興味があるんだ」
黙って何も言わず、服を着てマンションを出て行った。

男にも襲われることがあることを初めて知った。

これでピアノの弾き語りの仕事はなくなった。

トラウマができてしまった。

女性からでさえも、あの行為をされると違和感があるのだ。

奥底に入り込んでしまった。

それから数日して懲りずに浅草へ行った。

六本木よりは繁華街ではない下町だ。

弾き語りの仕事がえられるかと思った。

人通りがさみしくなったエリアで、ピアノスナックの看板を見つけた。見知らぬ店だし、人通りのほとんどないので、ためらったが思い切って店にはいった。

店のカウンターにすわると、

しばらくして中年風の男性が別室から登場して、ピアノの弾き語りをはじめた。

ピアノにすわる後姿はかなりの猫背になっていた。

古いジャズの曲を1曲弾いたあとに、

店のボックス席にすわった男性が歌いたい楽譜本をもってピアノに近づいた。

客は『夜の銀ぎつね』や『コモエスタ赤坂』などの歌謡曲をピアノの伴奏で歌った。

ピアノマンが休憩でカウンターに来たときに、声をかけた。

来店の目的を話した。

ピアノマンは店で働きながら、客がいない時に練習することを勧めた。

バイトもできるし、ピアノマンから弾き語りの極意も教わることができると思う、

店でバーテンダー見習いとして働くことになった。

丘の上の馬鹿(2011-11-6) (後書き)

2011-4-12

ホストクラブは、そっとおやすみ（2011-11-13）

浅草のピアノスナックでバーテンの見習いをはじめた。

店にスロットマシンが置いてあって、今だと違法賭博だろう。

100円玉を入れてゲームができる。

三つのバーがそろくと100円玉が50枚落ちてくる。

カウンターでスロットの成り行きを見ていて、

そろそろバーが三つそろうタイミングがわかるようになった。

何回か当てたが、店のマスターに見つかり注意を受けて、スロットはやめた。

お店は朝の4時までで、店が終わると、

相撲の朝稽古をしている九重部屋を見ながら始発の電車を待った。

九重部屋周辺は浅草寺の裏にあたる、

東京北部地域を回る屋台ラーメンの帰還場所で

通りの下水に捨てられたラーメンスープの異様なニオイがしていた。

バイトをはじめて一ヶ月が過ぎたがピアノマンは何も教えてくれなかった。

弾き語りの修行はあきらめ、ピアノスナックもやめた。

浅草は通うには遠すぎたし、深夜バイトは続かなかった。

新宿で新しいバイトをみつけた。

キャバレーだ。

次のバイトからひとつのマイルールを決めた。

ピアノの修行ができないなら、

社会勉強として、いろんな業界をのぞいてみたいと思い、一ヶ月限定のバイトにした。

キャバレーの店内には前方に大きな舞台があり、バンドの演奏が行われた。

仕事は黒子の見習いで、

酒やつまみを運んだり、灰皿の交換などをした。

キッチンに入ってガムシロップ作ったり、高級な酒の空瓶に安い酒を入れたり、

水商売というものは気狂い水と言って、

客を酔わせて気狂いにするのだとチーフがよく口にしていた。

裏ではなんでもありの世界だった。

入って3週間を迎えた頃に店の業態が変わってしまった。

女性ホステスを一掃してホストクラブになった。

もう一ヶ月延長してホストの世界をのぞくことにした。

当時のホストクラブは赤坂にひとつあるかないかの珍しいものだった。

たしか「青い部屋」が有名だった記憶がある。

キャバレー業界では経営が悪くなるとホストクラブにするらしい。

安い給料のサラリーマン相手より、

キャバレーやクラブホステス相手の方が、儲けが一桁以上違う。

かわりにホストクラブはキャバレーより長続きしないらしい。

客がなかなか増えないからだそうだ。

経営者が荒稼ぎして店を閉める時に行うひとつの方法らしいことも知った。

いろんなホストがやってきた。

俳優をめざす者、年をくった爺さん。

やってくる客はお店ではじめましてはなく、もう知っている女性だった。

おそらく客付きで転職してきたホストばかりだろう。

仕事は変わらなかった。

客が女性だけにちよつとしたクレームは多くなった。

「このガムシロ、甘くないわ」と客がさわぐ。

ホストはあなたのためにはすぐ対応とばかりにキッチンにやってきて僕にクレーム。

ホストは手製のガムシロップを自分で作って客のところへ持っていた。

そういえばその頃はガムシロップと言う商品がなかったのだろう。不思議と気になっている。

ホストクラブになって嫌だったのは客がペットの犬を連れてくることだ。

犬が粗相するのだ、てんこ盛りに。

始末は僕の仕事で苦痛だった。

ホストクラブに男性客が来ることがあった。

当時は不動産が絶好調で成金を多く輩出した。

男性客は何名かのホステスを従えて店にやってきた。

僕は可愛がられて、来るたびに相当のチップをもらった。

思うにあれは連れてきたホステスへ見栄をはっているあらわれだろう。

「赤胴鈴之助を呼んで」と女性客が指名してくる。

これは僕のことだ。

目がぱっちりして、たしかに赤胴鈴之助に似ていたかもしれない。

「やってよ、あれ」って言われて、

仕方なしに赤胴鈴之助のマネをしてはチップを稼いでいた。

今は有名になっている俳優がホストをやりながら役者業をやっている、

店の閉店の曲を歌った。

『ホタルの光』ではない、『そつとおやすみ』だ。

化粧の後の、かがみの前で、いつも貴方の手を借りた。
背中ボタンがとめにくい。

一人ぼっちの部屋で、今は居ない貴方に
そっと そっと おやすみなさい

歌謡曲の詩に魅力を感じるようになった。

一ヶ月が過ぎてホストクラブをやめた。

未成年の僕に客である女性との交際は一度もなかった。
チーフが、店を辞めるはなむけに言った。

「お前は気分次第で、気分が乗れば驚くほど気が利くし、人以上に
働くけど。

気分が乗らないと、これまたびっくりするほど働かない。
サラリーマンは無理だ。その弱点を克服することだ」

これはいまだに僕の短所でもあり長所でもある。

いつだっただろう。

ホストクラブが閉店したことを知る。

『そっとおやすみ』は永遠になった。

ホストクラブは、そつとおやすみ(2011-11-13)(後書き)

2011-11-14

初体験の思い出、じゅらくヨーン

あの頃僕は新宿に出没した。

フーテン（その日暮らし）風が多きたむろし、公園ではギターで歌っていた。

当時、新宿はく若者の街と呼ばれていた。

新宿という街自体が青春時代だったように思える、若者はなぜか新宿に集まった。

時代でいうと日本自体が青春期だったかもしれない。

踊りはソウルではなくゴーゴーダンスでGET、トレビ、ACB^{アシベ}などの店があった。

でもだんだんにソウルステップに移行していた。

ジャズ喫茶が多くビリーホリデイ、コルトレーン、マイルスなどを聞いた。

特に僕はカーメンマックレイの歌が好きで身にしみていた。

新宿は行けば何かおこる街だった。

歌舞伎町と駅を隔てる道は地下の工事中だった。

後にサブナードという地下街となる。

歌舞伎町は、おもしろかった。毎晩何か騒ぎがあった。

火事や喧嘩そして路上にいつも誰か倒れていた。

映画「真夜中のカーボーイ」にでてくるニューヨークと同じだ。

ホストクラブに出勤するとバンドがサントワマミーの替え歌を歌い上げていた。

く街に出るとオカマが誘い、ただ意味なくつきまとうだけくそんな替え歌が笑えるどころではなくなった。

アメリカで生まれたヒッピー精神は、ここ新宿に根付き、次の波が押し寄せようとしていた。

サンフランシスコで同性愛が台頭してきたのだ。

その波は新宿にあらわれてきた。

ゲイが街を闊歩するようになってきた。

僕にも被害が及んできた、ゲイにナンパされるようになったことだ。タクシーに乗ると、突然僕の顔を見るなり、いっしょに乗り込んできて

「可愛い。ねえ、どこかへ行こう」と誘ってくる。
これはゲイのオーソドックスなナンパ方法だった。

逆ナンはゲイだけでなかった。

あれはホストクラブのバイトが終わり、早朝5時頃テクテクと横断歩道を歩いていた。

その歩道には信号待ちのタクシーがいて、後部座席に女性が二人、なぜか僕はそのタクシーの座席の女性に目がいった。

びっくりするようなブロンドの彼女が僕にウィンクした。

僕は彼女の乗ったタクシーに近づくと、

「いっしょに朝食でも食べない。ねえ 乗らない？」 ともう一人の日本女性が言う。

タクシーの前の座席には男性がひとりすわっていた。

あとで知ったことだが男はホストで女性二名はそのホストクラブの客。

男はユースケ・サンタマリアのようにトッポイ。

北村一輝さんのような人だったらビビって、同乗しなかったかもしれない。

僕は仕事の黒のタキシードのいでたちだった。
彼女らは他の店のホストと勘違いしたらしい。

ウィンクした彼女はフランス人で、赤坂でダンサーの仕事していた。

映画に出てくる女優のようだ。

もう一名は日本人で、何をしているか聞かなかった。

同じダンサーとは思えなかった。

タクシーは青山に着いた。

僕ら四人は早朝から営業しているレストランで朝食をとり、近くにあるフランス人の彼女のマンションへ歩いて行った。

マンションは一LDKで、リビングにあったソファにすわった。

飲み物が出たかどうか忘れたが、覚えているのは赤坂の店でどんな踊りをしているか、

彼女はその衣装に着替えて踊りのショータイムがはじまったことだ。頭には宝石のようなイミテーションがちりばめられたセクシーな衣装だった。

テレビで観光ホテルの宣伝があった。

「じゅらくヨーン」と呟く、あれだ。

マリリン・モンローのそっくりさんが色っぽい声で言う。

彼女はフランスから踊るために出稼ぎに来ていた。

しばらくして、日本人女性の方が眠いので帰ると言う。

ホストもその女性を追いかけるように帰っていった。

「あなたどうする？」と、たどたどしい日本語で僕に尋ねた。

「帰りたくない」と僕は言った。

「そう」と言って、彼女が微笑んだ。

ジャズバンドとジョゼとの別れ

次のバイトは中華飯店だった。

新宿のデパート地下にあり、昼時間には次から次に客が来て、僕も含めたウェイターとウェイトレスで5名はいたと思う。

大忙しだった。

クラブ活動もずっとバンドボーイだけで、なかなか外での演奏チャンスがこなかった。

同じ一年生でもほとんどが年上だった。

一浪か二浪で、練習曲の選定で僕に主導権はなかった。

僕はビートルズの『ビコーズ』やアルバムアビーロードのB面をやったかった。

クラブの仲間から孤立しだした。

いっしょに入部した仲間でクラブをやめて、自分らでバンドを作っていくものがふえた。

その中にはあのスキンヘッドのサンプラザ中野氏やデーモン小暮閣下、小田和正、小室哲哉のような風貌の方がいたような気がする。

それに深夜のバイトでバンドボーイの仕事をサボるようになった。

僕はだんだん「ナレオ」から遠ざかっていって自然退部してしまった。

そしていつのまにか「ナレオ」の隣の部室でピアノを弾くようになっていた。

ピアノが弾きたくて、僕は部室でひとり弾いていたのか、

それとも、隣のジャズクラブのピアノだったか、はっきりおぼえていないけど、

ジャズクラブ関係者からピアニストが足りないから入部してくれと言われた。

ピアノを弾けるならと入部することにした。

ピアノの弾き手は、どこでも少ない。

クラブはいくつかのコンボ（バンド）に分かれていて、僕は松崎しげるリーダーのコンボに入った。

この先輩が僕の最後のロックバンドのリーダーになるって、そのときは想像もつかない。

同年生のドラムと、4年生のベース、トロンボーン、トランペット、クラリネットという構成だった。

曲はクールジャズでなくてデキシートかニューオリンズなどの古いジャズを演奏するクラブだった。

夏休みには長野県の旅館を借りて合宿練習が行われた。

コンボは10以上あっただろうか？

大学の観光クラブがクラブ用にバスを所有していて、そのバスを借りた。

古い老朽化したバスだったが動いた。

運転手も観光クラブの学生だった。

観光クラブとしては長野県までのバス運行はクラブ活動の一環だったようだ。

2週間、3週間だっただろうか？

僕らのメイン曲は「ロイヤル・ガーデン・ブルース」で、毎日練習して、腕があがらなくなるまでピアノを弾いた。

僕らのロイヤルはとてもテンポが速く、力強いパワーで押し切る感じだった。

アームストロングやBENKOの演奏するテンポだった。

でも楽譜通りに弾かないのがジャズで僕らのロイヤルはロック風にガンガン飛ばしていた。

秋の大学祭でクラブ発表会を兼ねたコンサートが行われた。クラブは大所帯なので、僕らの演奏は一日数曲だけだった。

ロイヤルとMuskrat Rambleを演奏した。

僕とドラム以外は全員4年生で、この大学祭が終わってコンボは解散した。

この大学祭でのことを思い出そうとしたが、この程度のことしか思い出せなかった。

しかし、ある映画を観てこの大学祭での淡い思い出が蘇ってきた。その映画は「ジョゼと虎と魚たち」という。

ジョゼというのは僕の好きな作家フランソワーズサガンの分身のような女性で、彼女の作品に数多く登場する。

ジョゼはとてもシャイで、何事にも強気に出れない女性、僕はサガンをそんな女性だと思っている。

彼女の自伝映画でも、他人が気に障ることをサガンに言っても、彼女は怒らない。

だが突然その場から消えてしまい二度と戻らない。それがサガン流の怒り方だった。

この映画「ジョゼと虎と魚たち」はサガン作品が好きなビッコの少女がジョゼと自称して同年代の若い男とのかかわりをえがいている。

虎は彼女の強気な面、魚は彼女の内向きなおくびような性格を表現しているように思う。

このビッコのジョゼのような子とつきあったことを思い出してしまった。

吉祥寺に「赤毛とそばかす」というロック喫茶があった。

ロックは好きであったが、目的はナンパすることで、その店に来て

いた三名の高校生と知り合った。

音楽の話しが中心でチェツペリンとかディープパープルなどが飛び交った。

三名ともになかなかの美形で、不良学生には見えなかった。その中にちよつとビッコの子がいた。

とりあえずその子の名前をジョゼとしよう。

おそらく小児麻痺だと思う、片足の関節が曲がらないので、歩くときがちよつとビッコする。

なぜだろう、僕は他に美形の子がいたが、僕はジョゼが気に入ったのだ。

アグネスチャンのような感じで可愛かった。

それからしばらくして僕はジョゼに電話して他のロック喫茶をめぐるような交際をはじめた。

中央線沿いにはロック喫茶が多かった。

「飛行船」が一番のお気に入りだった。

つきあいはただそれだけで進展もしなかった。

そして大学祭にジョゼを招待した。

ジョゼは「赤毛とそばかす」で知り合った他の2名と僕らの演奏を見た。

その日の帰りか、しばらく経ってなのか覚えていない。

僕とジョゼは吉祥寺の駅付近にいた。

ジョゼが変なことを言い出した。

「大学祭楽しかったわ。レイコが一生懸命に、あなたのピアノ演奏みていたよ」

僕は吉祥寺駅で別れてしまった。

たしかに、レイコはとびっきりの美人だった。

ジョゼは私よりはレイコが言ったのかもしれない。

高校生の女の子だ、素直になんかなれないだろう。

僕はビッコなんか平気だった。可愛かった。

でも18歳の僕には彼女があたしでいいのって確認していることをわからない。

額面通りにうけとめ失恋したと思ってサヨナラした。

今思えばふられたわけではない。

むしろジョゼは僕からそうじゃないという言葉待っていたのだ。

このことは年齢を重ねてわかること、若さは人を傷つけてばかりいる。

ロックバンド・マザーブレイン

人生の巡り合わせなのか、ジャズクラブのメンバーが解散して、音楽的には空白ができた頃だった。その穴を埋めてくれるような話しが飛び込んできた。

学生寮の隣人の紹介で、僕はロックバンドに参加した。

隣人の高校のクラスメートがバンドを作って、キーボードを募集していたのだ。

「俺はそんなに上手くないよ」と僕は言った。

彼は「チェツペリンの『オレンジ・ソング』程度でいいんだよ」と答えた。

「ああ、それなら弾けるよ」と僕は言った。

そのバンドの構成はギター二名、ベース、ドラムだった。

ギターの一人が年長でリーダー的存在だった。

バンド名はマザーブレイン（母の知恵）で、リーダー的存在の彼が『マジックキー』という曲からとったと言っていた。

中国人のマナージャーがついていて、マザーブレインの売込みをはかっていた。

12月から仕事がとれると言っていた。

最初の演奏はS大学の文化祭ロックフェスだった。

もう出来上がったバンドに参加したと思っていたけど、今思うと、できあがったばかりだったかもしれない。

僕らのレパートリーはサンタナの曲が多かったが、ディスコの曲は必須で『ゲットレディ』『ビーマイベイベー』などが印象的だった。12月からの仕事でオーディションがあった。

その時もうそのリーダー的存在の彼はいなかった。

残りの3名は高校からの同じクラスメートで、彼はみんなより年上でソリがあわなかったようだ。

僕もこのバンドでは新入りで一番の年下で異邦人みたいな感じだった。

た。

彼がはずれたことは僕には何も説明がなく、自分はこのバンドで、ただの助っ人だと感じた最初だった。

オーディションはディスコクラブのオーナーが集まって、どの店で音を出すのか決めるものだ。

この頃のディスコクラブはまだディスクジョッキー（DJ）システムでなくてバンドの生演奏が主流の時代だった。

新宿コマ劇付近のクラブのステージでオーディションは始まった。多くのバンドが参加していたと思う。数えてみなかったので正確な数はわからない。

全員アフロスタイルでジャクソン5みたいなバンドや、サックス奏者がアメリカ帰りとかで、いきなり彼のサックスではじまる、ほとんど彼のワンマンシヨウ的バンドとか。初めてクラブネットを見た。

ステイヴィー・ワンダーの『迷信』で使われ、ギターなどで用いる電気ピックアップで音を拾うキーボードで、音が硬くてなんとも言えない音色を出す。普通のキーボードでは絶対出せない音だ。僕らはサンタナの『ブラックマジックウーマン』を演奏した。

最初に僕のイントロで始まる曲で、緊張したことを覚えている。オーディションの結果、池袋のクラブ「ペック」に決まり、12月から音出しがはじまった。

演奏することを”音を出す”と店のオーナーたちは言っていた。

これ業界用語らしい。僕には差別的なニオイがした。

おまえたちは良い音を出してくれればそれでいいんだと言われ、バンドの仕事をゴトシと言った。

クラブ「ペック」は三越デパートの隣の7階建てビル6階にあった。

エレベータは、ふたつあったがいつも混んでいた。

店内はボックス席になっていて、入って右側奥にステージがあった。

ステージの周りは踊れるようになっていた。

100名かなあ。200名は座れない？

正確に数えていないけど、意外に広い店内だった。

18時から終電までの拘束で、ギャラはちゃんともらった。その当時10万だったと思う。

クラブにはもうひとつバンドがいて交代で音を出した。

演奏佳境になるとアンプが香ってくる。

椎名林檎が『丸の内サディスティック』で歌う「マーシャルのニオイで飛んじやって、たいへんさ」を実感するようになった。

失恋後遺症

このクラブは以前のキャバレーかダンスクラブをそのまま利用している感じだった。

僕らははじめてにしては、よく演奏できたと思っている。

バンドの弱点は、正式なボーカルがないことだったと思う。

僕とギタリストと、たまにベース担当が歌った。

ブラス（管楽器）やパーカッションがいるわけでもない。

クラブが必要とする本格的なソウルバンドではなかった。

それに僕にはキーボード奏者と言えるだけのテクニックはなかった。

キーボード奏者はバンドの中でお飾りで済ませることもできる。

ただコードを流しているだけで済むのだ

僕はアドリブが下手で、いつもなんとなくごまかしていた。

そんな12月のある日僕の人生でずっと心に残ってしまった女性に出会った。

演奏が終わり、バンド交代が終わった時に、僕はクラブに来ている客に呼ばれた。

どれくらいの人数でお客は来ていたのだろうか、男女5、6名だったと思う。

カップルではなくて仕事の納会で来たような客だった。

「君はいい声している、キーボードもいいよ」と男性客がお世辞を言った。

「そうですか？ありがとうございます」と彼の発言にちょっと否定するような態度で言った。

「それに引き換え、あのギターは下手だね」と男性客がつけくわえた。

「ええ！そうですか？」と僕は意外な発言にちょっとびっくりした表情で言った。

ギターが酷評されたのは意外だった。
たしかにギターはリードが多いので、雑なプレイになるとかなり目立つ。

野球でいうエラーだ。イチロウだってエラーする。

毎日弾いているとエラーは必ず起こる。

私はうまくごまかすが、ギターリードでのエラーはごまかせない。
バンドの中でギターは一番つらいポジションにはあった。

というのは、その頃のサウンド、特に僕らのバンドはサンタナ中心なのでギターがメインとなっていたからだ。

そのお客の中に藤原紀香そっくりの女性がいた。だから彼女を紀香として話しを進める。

僕は客の中にいた彼女を見た途端にうっとりとしてしまった。

「君は左利きかね」と男性客が聞いた。

食べてと言われ、料理をつまんだフォークの持つ手で見破られた。

「ハイ」と僕が答えると、「私の、私の彼は左利き」と他の女性客が鼻歌した。

紀香もにっこり笑った。

「ねえ、何歳なの」と彼女が聞いてきた。

「19歳、大学一年」

「そうなんだ、私と同じ」

「僕より大人だね、年上だと思ったよ」

「そうね。もう社会人だし、髪はショートだし化粧すると上にみえてしまうものよ。仕事の仕事だから」

「仕事って、何？」

「化粧品よ、Sデパートの化粧品売り場にいるの。マックスファクターよ」

「デパートの一階は化粧品売り場で独占しているね」

「うん」と彼女が肯いた。

するとバンドが『ゲットレディー』のイントロを演奏しだしたので、みんなで踊りに行った。

彼女は踊りなれていた。

「踊り、うまいのね」と彼女が聞いた。

「うむ、踊りが好きなんだ。よく踊りに行っているよ」

「バンドやっていて、踊りが好きな人は少ないんじゃないの？」

「そうかなあ」

確かに他のバンドマンが踊っているのを見たことがなかった。

踊りが終わって、僕は客の座ったボックスに戻らないで、失礼することにした。

別れ際に彼女が「今度デパートに来て、15時頃暇だから」とこっそり言った。

数日たって、僕は15時頃その売り場に行った。

彼女が、にこっと微笑んでやってきて

「向かいの耕路という喫茶店にいて、ちょっとしたら行くから」と言った。

耕路はデパートの本当に真向かいの場所にあった。

僕は行くたびに他の店員とも顔見知りになって、にこっとされた。

おそらく彼女らはまた来ているって思ったのだろう。

同じ年齢同士なのだろうか、相性があったのだろうか？

彼女と会っていて楽しかったのだ、そして僕の学生寮に泊まった最初の女性だ。

電気を消して暗くすると彼女の目がキャッツアイのように輝いた。

彼女は白金台の電器店の娘で、恋愛経験は豊富にみえた。

数週間たったある日に紀香が変なことを言い出した。

「私、結婚申し込まれたの。それで悩んでいるの・・・」

そこまで言うとなんか泣き出した。

「じゃ結婚すればいい・・・」と僕は言ってしまった。

そのあと僕はどんな風に別れたか覚えていないほど呆然としていたと思う。

フラれてしまったのだ。

彼女が幸せになればいいと思った。

僕は恋愛とかその他のことでも、テンビンにかけられるのが嫌だった。

好きな女性を男二人で争うとなると、僕は引き下がってしまう、戦線離脱してしまうのだ。

そんな時の女性の気持ちが許せないのだ。まったく物の選択と同じではないか。

決めるのは彼女の方にあると思うのだ、決められないのであれば去ってしまう。

それに僕は学生だしバンドマンだし対抗できないのも確かだった。

紀香の失恋はこたえた。

僕はそれからある後遺症を持つようになった。

それはどのデパートでもいい、一階には必ず化粧品売り場がある。

僕は行くたびに感じてしまう。紀香の笑顔がどこから飛び出してくさそうで。

そして、またきていると注目されているような感じがして。

お持ち帰りできた頃

僕は失恋して落ち込んでいたが、演奏と踊りに熱中した。

演奏が終わり休憩の時はこのクラブで他のバンド演奏で踊った。

踊り仲間ができた。クラブのお客でチーコ、ミーコ、トコという3人組だった。

休憩時間の食事にトコがつきあうと言い出していっしょに食事した。

トコは髪が前分けのソバージュで、袖がルーズで腕が隠れるようなセーターをしていた。

ご飯を食べると長い前髪がご飯についているのに気づかない。

髪からご飯をとってあげたりして、こっちがお守りしてあげないと駄目なタイプだった。

トコは同棲していたが彼と喧嘩したらしく、今夜は泊めてくれと言う。

「でも泊まっても何もしないでね、約束よ」と彼女が言う。

だから僕は何もしなかった。

次の朝「何もしないのね」ってトコに言われた。

19歳の頃は、これがわからなかった。

何もされないと逆に傷つくのだろう。

チーコはウチのドラマーと交際していた。

ウチのバンドでは俳優の藤原竜也にそっくりのドラマーが一番モテた。

クラブではバンドは2交代制だった。

もうひとつのバンドが全部女性のバンドの時があったが、その女性達ではドラマーが可愛いってアタックしていた。女性客にも一番ファンが多かったと思う。

色白でボーイとしているけど、とてもシャイそうで可愛い感じだった。

チーコと半同棲していた。

ベース担当は鼻が高くキレがな目で背も高く、バンド随一の二枚目でファンがいたが

しかし近寄りがたい感じがして、女性と親密になっているのを見たことがなかった。

彼女がいるような気配はなかった。

ギタリストはなかなか彼女と縁がないと嘆いていたが、このクラブに来ていた客と親しくなって同棲生活に入った。

さてドラマーの彼女のチーコだが、これまたトコと同じ髪型のソバージュで化粧が濃くて、

目が細くてかぼそい声で、とても女性的で、長いセーターに黒の長いスカートだった。

ミーコはチーコとは正反対の服装で、女性VANスタイルでベレーにギャザーのミニスカート、つまり女性アイビールックで声も大きかった。

トコはお店に来ることがなくなって、チーコとミーコとよく踊っていた。

クラブは大晦日から正月が休みだった。

覚えているのは大晦日に新宿のクラブに行ってチーコとミーコと踊ったことだ。

チーコドラマーの彼氏は正月帰省しているとのことだった。

紀香にふられて落ち込んでいて一人でいるのが寂しかったのだろう。

社会人になって恋愛をいくつか経験してみても、

僕としては地獄のようなつらい経験を何度かして思ったことがある。映画「カサブランカ」のボギーのような気持ちになる。

もう恋愛はしたくないが、もしそんなことがあれば12月に別れるのだけは避けたい。

大晦日が辛いのだ。これはなぜだろう。

なぜか一人でいることに耐えられない時期なのだ。なぜか群れに入りたがる。

だが周辺のカップルを見ているとたまらなく涙があふれてくる。

最近は映画で恋愛の疑似体験をして、

すましてしまうことをみつけたので、恋愛したいという気持ちから超越することができた。

19歳の大晦日のカウントダウンは新宿のクレージーホースで迎えた。

本当に踊りが好きでソウルステップの歴史と共に人生を送ってきたようなものだ。

ポイント、バンプ、ロボットなどなど。

初詣しようということになり、山手線の電車で原宿まで行った。

大晦日の山手線は24時間動いていた。

原宿の「レオン」でお茶を飲んで一息してから明治神宮にくりだした。

明治神宮は日本一初詣する人が多い神社で、人の海で僕らは身動きがほとんどできない。

3人でスクラム組んで行進した。

賽銭箱まで行けないし、なんとか賽銭箱に投げる入れる距離で足止めされた。

賽銭硬貨が頭に当たったりしても拾えなかった。

拾わないようにガードマンが見張っていたからだ。

その後学生寮に戻ってベッドに二人の女性に囲まれて正月の朝を迎えた。

ただのGF（女性の友達）だけだ。

僕はSをする子とそうじゃない子はきっちり分けることができた。例外もあるが。

チーコのようにドラマーの彼女というレッテルが張られているとそれは絶対的で、

とにかくヒトサマの彼女とか奥様なんてものはなぜか欲しくならな

い特殊な能力があった。

正義感で僕の中は充滿してしまうようだ。

なぜかわからないが、これが僕の特長で、同じ職場とか同じ学校というレッテルがあると恋愛対象から自然に除外してしまう。何か兄弟親戚のように思えてしまうのだ。

僕が目をさますと、台所にチーコの後姿が見えた。

「何時だ？」って僕は聞いた。

「もう11時頃よ」

「そうだ。あけましておめでどう」

「そうね。あめでどう。しかし部屋綺麗にしているのね」とチーコが聞いた。

「何も置かないのが好きなんだよ」

「この白いテーブル、6名は座れるね」

「大きすぎるだろ、白いテーブルがこれしかなかったんだ」

「自炊しているのね」とチーコが聞いた。

「うむ、ご飯を炒めるのに凝っている」

「どんな風に？」

「博多風ヤキメシとか高菜チャーハン、カレーピラフとかその他いくつか気分でチャーハン系を作っているよ」

「博多風ヤキメシって、どんなの？」

「博多では焼き飯と言えばソースをかけてちよい焦がすような炒め方するんだ。焼きそばと同じ味だよ」

チーコは僕が自炊するのを知らないで自分で作るつもりで用意していた。

「ねえ、クリームシチュウ作ったけど、お餅いれていい」

「いいねえ、おいしそうだ」

そんなふうに19歳の僕は帰省しないで東京での新たな年を迎えた。その後数名ほど、女性と知り合ったが長続きはしなかった。

バンドの仕事が終わって、お持ち帰りすると、

「いつもこんなことしているんでしょ」と皮肉を言われてしまったことがあった。

紀香のような女性はいなかった。顔だけではない、相性が一番だったと思う。

ドラマーやギタリストや他の知人が同棲して、同棲が流行の時代だったが、僕には同棲したい女性は現れなかったし、そのまま住みついてしまう女性もいなかった。

バンドマンというのはお持ち帰りができる。

僕がキーボードに座って歌っているとずっと立ちんぼで聞いて離れない女性がたまにいた。

歌ったのは『ベン』とか『イフ』とかのスローな曲の時だった。

バンドをやめて普通に帰った時にお持ち帰りができなくなったことが残念だった。

バンドをはじき出された

12月から始まったクラブペックでの音だしは1月も続いた。

ある日のことだった、クラブのマネージャーが変な動きをしている。僕は演奏していると彼の行動がよく観察できる位置にあった。

彼は凛々しく寡黙だが威厳があってスポーツ刈りをした40歳代の男だった。

ディスコクラブのマネージャーは長髪でヨーロッパスタイルの優男風が多いが、彼は違った。

おそらくキャバレーの黒子からなりあがってきた感じだった。このキャバレーのマネージャー風の彼がだんだんおかしくなっていく。

最初はひとり芝居をして笑わせているようにみえた。

突然に横へ蟹のように移動するような余興をやるのだ。

あの頃テレビで流行っていたドリフの物真似かとも思った。

これはおかしいとはつきりわかったのは、店の柱に猿のように抱きついて不気味な笑いをするようになったことだ。

それからしばらくしてマネージャーはいなくなった。

あとで知ったことだが、彼はシャブで狂人になったらしい。

あの凛々しかったマネージャーはいなくなった。

そして僕にも悪い話しがやってきた。

バンドリーダー（ベース）は僕を呼んで言った。

「女ばかりおいかけて テクを磨かない。俺達は新しいバンドで修行する」

クラブとの演奏契約は二ヶ月で、一月末で終わる。クラブとの別れが近づいていた。

この頃の演奏契約は通常二ヶ月契約だった。

バンドも演奏するレパートリーが尽きてきて客からあきられる。新たな曲もとり入れたが、完全に全曲をリニューアルするまではいかなかった。

それに僕はバンド仲間より女性たちという時間が長かった。

そのしつぺ返しがとうとうやってきた。

僕はプロではない、下手なのは認めるが、僕だけがこのバンドから外れるのがショックだった。

でも元々2ヶ月前に、いきなり入った新参者だから、バンドでの信頼関係も薄い、しかたがないと思った。

僕が、あっさり合意したのでメンバーも悪いなって言ってくれたのが救いだった。

何事にもあつさりしている。まあいいかと、粘って抵抗することを知らない。

言われるままに流れるローリングストーン（流れ石）のようで、僕には時間の蓄積による栄光の苔はつかない。

ベース担当が言った新しいバンドとはこのクラブで交代して演奏していたバンドだった。

そのバンドと再編成するという。

相手のバンドリーダーがプロのキーボード奏者なので、僕が不要になったわけだ。

そのバンドでは他のメンバーが抜けて困っていたということが推測された。

僕たちのバンドもクラブとの契約が終わり、次の新たな仕事を探したいが、

中国人マネージャーはいつのまにかいなくなっていた。

そんな時に話しをもちかけられたのだと思う。

再編成されたバンドの行く末は、どうみても悲惨だった。

いつだっただろうか、久々にメンバーに会いに行ったことがあった。

そこは五反田のキャバレーで、裸体ショーが行われる時の音出しをしていた。

バンドメンバーは、バンマス（バンドリーダー）のキーボード奏者と後はマザーブレインの旧メンバーだった。

単純に僕だけが変わったバンド再編成にさみしさを覚えた。

しかし残りのメンバーは学校からの竹馬の友のようだった。

三名ともに中野に住み、スーパの冷めない距離にいた。

ギタリストはまだ同棲が続いていた。

ドラマーはチーコと別れてこのキャバレーで働く女性と暮らしていた。

さて僕のバンド離脱通告は1月末ぎりぎりではなくて一週間前だった。

バンドを離れることが決まると、なぜか僕は田中氏のことを思い出した。

昨年キャバレーのバイト先で知り合った田中氏に電話して次のバンドの紹介を依頼した。

僕はキャバレーで黒子のアルバイトをしていた。

客の誘導と酒やつまみの運びをやっていた。

そのキャバレーにはバンドが入っていた。

ある日のことだ。

「そうか 君はバイトだがバンドマンをめざしているのか」

田中氏は聞いてきた。

「はい」と僕は言った。

「あのギタリスト、どう思う」と田中氏がたずねた。

「なんかぎこちないですね」と僕が言うと

「そうなんだ。」

俺が欠員になったギタリストを紹介したので気になって、みにきたんだ」と田中氏は言った。

「君のパートはなんだ」と僕に尋ねた。

「キーボードです」と僕が言うと

「そうか。キーボードは不足しているので、

バンドに入りたかったら電話してくれ。田中だ」

と言って電話番号のメモをくれた。

僕はそのメモを大切にとっていて、バンドの休憩時間に田中氏に電話した。

電話はうまくつながった。

「クラブ・ペックで音出していますが、今月限りです。

来月からの仕事探しています」と僕は話した。

「そうか。わかった。ペックか。

仕事が見つかったら電話する」と田中氏は言った。

「ありがとうございます」とお礼を僕が言うと

「俺はバンドマンの世話をやくのが好きなんだ。

気にするな」と言った。

そして数日も立たないうちに田中氏からクラブに電話がある。

「みつかったぞ。やるか？」

「やります」と僕は言った。

「よし。1月31日に、今度行くバンドの者を行かせる」

僕はその日最後の演奏が終わりバンド控え室にいたら、

来月から参加するバンドのギタリストがあらわれた。

僕はバンドの仲間に別れを告げて、キーボードをギタリストの車にのせて、

次に演奏するクラブへ運んだ。

場所は新宿だった。

まさか、そこが、クレイジーホース関連店の「ブローハウス」と知って驚いてしまった。

日本でも一二を争う高級クラブなのだ。

二番目のバンド

新しいバンドの名前はThe・Comportと言った、メンバーを紹介しよう。

ギターは妻夫木聡、25歳前後だろう、法政大学卒、スタジオミュージシャン。

なかなかの美形で、大学でギターチャンピオンだったらしい。

ドラムはバンマスでもあるジョージ、40歳前後にみえた。

ジャズの大御所ジョージ川口の弟子だそうで、上唇にヒゲをはやしていた。

ベースは山下達郎、スタジオミュージシャン、妻夫木と同じ年だろう。

そしてボーカルとアルトサックスは石立鉄男、30歳前後、上智大学卒だ。

上智大学の授業は全部英語で行われるそうで、歌う英語の発音が良かった。

上唇にヒゲをはやしていて、とてもエキゾチックな顔をしていた。彼は前のバンドでテレビ出演もしたことがあってレコードを出していた。

そんな日本のバンド界の高い位置にいるメンバーの中に、

19歳の僕は突然パラシュートのように着地してしまったのだ。軟着陸のままに終わってしまった。

まずバンドのレパートリーはこれまで弾いたことのない曲ばかりで、

楽譜の初見が苦手で最初から彼らの音にはついてゆけなかった。

メンバーからは、もう”ひよっこ”扱いされた。

特に困ったのはチークタイムになると、完全に真っ暗になり、楽譜

がみえない。

めくらで弾かなければならなかった。

しばらくしてペンライトをうまくマイクにつけることにした。

バンドメンバーも僕の実力がわかり、得意な曲はなんだと聞いてきたので、

僕は「青い影」だと言った。

つまりは得意な曲しか弾けないと、みすかされたわけだ。

チークタイムでの僕の十八番となり、ドラムのジョージが歌った。

交代のバンドはイギリスから来たバンドで、彼らの曲は日本でもヒットしていた。

彼らからも”ひよっこ”扱いだった。

バンド交代の時に曲を弾きながら引き継ぎをするが、アンカーは僕だった。

彼らから「ヘイボーイ」と言われ、完全に馬鹿にしたような横柄な態度だった。

イギリスのバンドは女性二名（一人はキーボード）、ギター、ベース、ドラムだったと思う。

お客は高級クラブなのでクラブペックに来るような客はこなかった。中には芸能人もいた。その当時の有名な女優も来ていた。

だんだんに僕はバンドの一連の曲をマスターした。

『Killing Me Softly』『what's going on』『You've got a friend』『Are you ready』『All Day Music』『Sex Machine』

しかし、ある曲だけはいつも同じところでしくじり、バンドをこけさせた。

それは『Samba Pa Ti（君に捧げるサンバ）』というサンタナの曲だ。

この曲の途中のソロアドリブのイントロ部分がうまく弾けなくて、今にもなっても、この一小節がよぎる。夢でうなされたこともあつ

た。

ベース山下が僕のしくじりをフォローしてくれた。

「あの曲はサントナのライブでもキーボードが、こけていたぞ」

残念なのは僕が歌えないことだった。

下手なキーボードを弾き語りでカバーしていたのだ。

そんな売りであるボーカルはできなかった。

ボーカル担当の石立、ドラム・ジョージらの歌は本当にプロでうまかった。

出会いと別れ

バンド・マザーブレインを追い出されて、新宿で新たなバンドの仕事に入った頃だ。

約10ヶ月住んだ目白の学生寮からも素行が悪いとのことで追い出しをくらった。

ここには医大を狙う浪人生が数多く下宿していたからだ。

寮で一番親しく、同年で、バンド・マザーブレインを紹介してくれた隣人も

東海大に受かって寮を出ることになった。

僕と彼がこの寮では不良扱いされていた。

山陰地方から来た彼にはイングリッドバーグマンそっくりの彼女がよく泊まりに来ていた。

高校からつきあっていたそうで、彼女は医大生で、彼は一浪していた。

夜中に彼女が来ることがあるが、学生寮のドアに鍵がかかっているので、うまく入れるように手伝った。

白いベレー帽が似合い、こんな日本人がいるのかと今でも印象深い女性だ。

彼も日本人のマスクではなくて、その頃読んでいた雑誌「ルオモ」に出てくるモデルそっくりだった。

大学が近い神奈川県の方へ住むことになったので、彼とお別れ会をすることになった。

あれは引越などが落ち着いた3月だったと思う。

僕は彼の兄がマネージャーをする六本木のキャンティに招かれた。はじめて訪れたイタリアレストランの老舗、キャンティ。

六本木のちょっとはずれの飯倉という場所にあり、二階建てで、一階の正面入り口から入り、

まっすぐ奥に進むと踊り場があり、二階への階段があった。

その階段の途中に、ワンテーブルほどの空間もあった。右側にあったが、中二階だと記憶する。

踊り場は下の地下にも続いていた。

地下は左に厨房があり、右には厨房とは完全に仕切られた観葉植物で囲まれた空間があった。

この地下にはこの店の左側からも直接入ることがきて、地下の窓からは外の自然光がはいるようになっていた。

僕らは地下のテーブルにすわった。

その地下では、既に、いしだあゆみが食事をしていた。

地下はなかなか座れない場所だった記憶がある。

記憶は曖昧だが、たしか彼女の誕生日だと、彼の兄から教わったと思う。

お店の人がいろんな料理を出してきて、彼女が美味しいとはしゃいでいた。

僕のがれの女性だった。

僕の六本木への傾倒は、ここでも芽を出し始めていた。

このキャンティはその後、常連のように通う時期があり、数多くの有名人を見ることができた。

学生寮の大家から出てほしいと言われて、僕は高田馬場に小さなマンションをみつけた。

大学に近くないと、僕のようなめんどくさがり屋は大学へ行かなくなるからだ。

マザーブレインのバンド仲間とその彼女たちが引っ越しの手伝いにくてくれた。

彼女たちとはチーコとギタリストの彼女。

バンドを去った後も優しくしてくれて嬉しかった。

マンションは5階建てで間取りは1Kだった。

ドアを開けると一畳ほどのキッチンがあり、真向かいにお風呂ルー

ムとトイレルームがあつた。

キッチンが右側に進むと6畳の部屋があつた。

19歳にしてはじめてマンションに住むことになった。

ボーカル石立の弱点

さて二番目のバンドの話に戻ろう、19歳の2月の頃だ。

クラブ・クレージーホースはチェーン店が多く、新宿にも二店あった、

つまり若者向けと大人向けクラブ。

僕らのバンドは大人向けクラブ「ブロウハウス」で演奏していた。だから若者はほとんど来なかった。

バンドの休憩時間は、若者向けクラブ「新宿クレージーホース」、僕らは「新クレ」と呼んでいたが、

そこまで歩いて5分程度なので、よく出かけた。

新クレでは無料の顔パスで踊った。

従業員が「ブロウハウス」と「新クレ」を行き来していたから、僕の顔は有名だった。

この新クレの下の階に新宿のムゲンがあったと記憶する。

さてクラブ「ブロウハウス」での思い出はいくつかある。

この店は内装だけでも日本で一番豪華な造りだと従業員が豪語するだけあって、

大理石と銅製でつくられた宮殿風だった。

僕らが演奏している時に、こんなことがあった。

チークタイムの時に店内が暗くなると、

男女が着席ボックスで裸になって抱き合いだした。

客の目はそちらに注がれた。

ボーカル石立は彼らの目の前に行って歌ったが、彼らはやめなかった。

店内が真っ暗の中、ますますエスカレートしていったが、

従業員も止めに、はいらなかった。
何々組の親分だったかもしれない。

このクラブで初めて知り合った女性はトシコだった。
ボーカル石立が音大の女子大生につきまとわれて、
クラブが終わっても帰れずにいた。

「困った」と彼は僕に訴えた。

「いや、離れたくないの」と酔った彼女は、からみながら言う。

「トシコ、しっかりしてよ」と、連れの里子は言う。

そして彼女に大変なことがあり、今荒れていると里子は弁解した。

「もう疲れたので寝に帰る。また店に来てくれ」

とボーカル石立はトシコに言った。

「じゃ、ついて行く、そばにいさせて。

寝顔だけ、みていればいいの」とトシコは懇願する。

彼女は本当に酔っているようだった。

ボーカル石立は僕を連れてトイレに入った。

「もうすぐ結婚するんだ。

今度こそは婚約者に、ばれたくない。以前なら、いい女なので食べたいけど。

いつもこれで俺は結婚を駄目になっている。

今度こそは大事にしたい。俺の車には乗せるが、

お前の家付近まで行くので、彼女を降ろしてくれ。

よろしく頼む」

ボーカル石立は車で来ていて、その車に僕ら3名は乗り込んだ。
トシコはもうボーカル石立の部屋にいけないと思ひ込んでいる。

高田馬場駅に着くと、ボーカル石立が「お客さん着きましたよ」と言う。

「お客さん、降りてください」とタクシーの運転手のような言い方を
する。

トシコも僕も笑ってしまった。

彼は本当に魅力あふれる男で、おもしろい話しでよく笑わせてくれた。

しかし「いやよ」とトシコは言う。

里子と僕とで車から彼女を降ろした。

トシコは、もうダウン寸前で、今にも路上に座りかねない。始発電車まで、まだ少々時間があつた。

僕の部屋に連れてゆくことにした。

どんな展開で、そうなったかは正確には覚えていない。

そこから数分で僕の部屋に着いた。

里子と二人で、なんとかトシコを部屋に入れた。

トシコはしばらくベットでじっとしていたがしばらくしてトシコの酔いがさめたらしい。

「うわー、素敵なマンション。ベッドはダブル？」

白い壁に桜系の薄いピンクのブラインドだった。

「セミダブルだよ」と僕は答えた。

里子はずっと無口のままだった。

トシコが落ち着いたので三名でベッドに寝ることにした。

「里子、この子、顔のわりには大胆よ」とトシコは言う。

僕はトシコにキスしたのかもしれない、よく覚えていない。好みのタイプではないが、魅力のある女性で浅野温子風だ。

里子は無視して背中向けていた。

そのうち里子は毛布をもってベッドを離れてソファに移った。

僕はトシコに、キス以上に何もしていないと思う。

15時ごろまで僕らは睡眠して、彼女らは帰っていった。彼女らとはこれっきりだと思った。

しかし、その次の日の電話があつた。

「昨日は、ありがとう。起きた？」とトシコは言う。

「あれ電話番号教えたっけ？」と聞くと、

「電話器についていたわ」

「そうか。それで。どこから電話してんだ？」と僕が聞くと

「バイト先よ。今、喫茶店のレジにすわっていて、暇だから」
それからしばらく毎日のように電話があった。

トシコとは踊りに行ったり、彼女の部屋に泊まったことがあった。
その日は決戦だと思って、二人で枕を並べて寝た。

しばらくして彼女が耳元でつぶやいた。

「私、妊娠して中絶したのよ。あの日、荒れていたでしょ」

僕はトシコが手術台に向かう光景が浮かんでしまって、

それ以上僕は何もできなかった。

好みのタイプではなかったが、会っていくうちに、
だんだんに僕は好きになっていった。

半年くらいしてだろう、告白することにした。

「いつもタイミングが悪い。なぜ？」

今思っているひと（男性）がいるの。

私に彼氏がいないときには、いつも言わないのよね」

そう言われたことが彼女との最後の会話だった。

妻夫木ギタリストの恋愛

女性関係ではボーカル石立が目立っていた。

既婚のドラム・ジョージと同棲中のベース山下からは、一度も女性の話しはなかった。

そしてだんだんにわかってきたのが妻夫木ギタリストの実態だ。最初はわからなかった。

彼は美男で長身、ギターもしびれるような音を出す。聞いてうっとりした女性は多かったはずだ。

法政大学時代に大学対抗のギターコンテストで一位だったそうで、早稲田大学ナレオのギタリストも指導したと言っていた。僕がみるかぎり、彼のまわりに女性のニオイはしなかった。どちらかという僕の方が目立ったと思う。

ある日僕はバンドの仕事が終わり始発電車を待ったために、いつもの喫茶店「イン・マイ・ライフ」で時間をつぶしていると、フランス女性が流暢な日本語で僕の名前を呼んで話しかけてきた。

「日本語上手ですね」と僕は尋ねた。

「私ハーフよ。名前はアンナ。

妻夫木さんから聞いたわ。

あなたって私が好きなサントナの曲でトチルみたいね」

僕はアンナが妻夫木さんとピロー（枕）トークしていると直感した。

「私、モデルの仕事しているの」

「そういえばテレビの石嶺のCMで見た覚えありますよ」

女優キーラ・ナイトレイにそっくりだ。

なぜか、この手の美人は僕の好みではない。

お高くとまった高飛車態度の美人は、僕は無視をするクセがある。

我がままそうで、つきあって、疲れはててしまうことが予想される。

これは僕の偏見かもしれない。

最初の印象だけで決めてしまうのだから。

性格が良さそうというか優しさがにじみ出てくるような美人が好みだ。

うまく表現できないので、

僕の好きなトルストイからその表現を借りると、

——それは彼女が非常な美人だったからでも、

その姿全体にただよっている繊細な感じや、

つつましい優雅さのためでもなく、

彼女がそばを通りすぎた時、その愛らしい表情の中に、

一種独特な慈しむような優しいところがあつたからだ——

次の日、妻夫木ギタリストにアンナの話をした。

「妻夫木さん、アンナ知ってます？」

「ああ、知っている。おまえの行く喫茶店はオレが教えた」

「妻夫木さんが食べたので、こちらに向けたんでしょう」と僕は言ってみた。

「。。。」しばらく沈黙していた。

「アンナはバンドマンあさりをしているんだ」と妻夫木ギタリストは答えた。

僕はアンナで、高校の時に言い寄ってきたあの美人の関根恵子进行出した。

同じニオイがした。

アンナはバンドマンの食べ歩きをしているのだろうか？

女性が男の100人斬りをめざす。

高校生の関根はそう豪語していた。

あの頃は誰の影響なのか、そんな女性がいた。

アンナも同じように思えた。

でも、ただ男なら誰でもいいわけではないのである。

100人斬りに僕がのらなかったで彼女らとは奇妙な友情関係になる。

その話しはとても長くなるので、別のタイトルで書くことにする。

この頃からだろう。

マスコミの情報が僕らには多大な影響を与えていた。

家出する少女、自殺する少女など、以前からあったと思うが、

マスコミが特別のようにとりあげだした。

20歳で自殺した高野悦子や17歳で自殺した岡崎里美らの手記には衝撃をおぼえた。

里美は、娼婦にもなれなかったし、ねこにもなれなかった、ヒットピーになりたかった

と書いて、ビートルズのアビーロードB面をかけて逝った。

悦子が書いた詩「旅に出よう」は歌にもなった。

僕らの仲間もこの詩の作曲をすることが流行った。

ビートルズの名曲『彼女は家を出て行く』に影響をうけて、全米では少女の家出ラッシュというブームになった。

僕も寺山修司「家でのすすめ」を読んで衝撃をうけた。

寺山言う、若者の未来の自由は、親を切り捨て、古い家族関係を崩すことから始まる。

母親の子供への愛情は片思いだ。

人は家から出ることと過去のしがらみから解き放たれた自分を見つけることができる。

親にとって、子が一人立ちできるようになった日からはもう子は自分のものではないのだ。

この寺山の言葉で僕の東京単身行きは決まった。

このようにマスコミから受けた影響は今思うと良くもあり悪くもある。

さて妻夫木ギタリストの話しに戻ろう。

彼はクールで、絶対本音を言わない物静かな性格。

年は25歳前後で、僕はまだ19歳だから子供みたいなものだ。だから、いろいろと僕には言いやすかったのだろう。

それに僕がアナにアプローチされても冷静なので、ちよつと意外だというような顔をしていた。

つまり僕に女性についても話してよいと思ったのだろう。

だんだんに彼は女性観について語りだした。

彼の理想は女性の元で暮らしてギターの練習をして

スタジオミュージシャンの仕事を行う。

スタジオミュージシャンの仕事とは歌手が新曲を出す。

当時はレコードだが、その新曲レコードを作成するの時に徴集されるミュージシャンで

ギヤラも良かった。

ミュージシャンで有名になるまで女性にめんどろを

みてもらったというケースはあるようだ。

女性も不思議にめんどろみるのが生きがいのような女性がいる。

いわゆるあげまん、有名なミュージシャンより無名で

これからという原石のようなミュージシャンを好んで選び、

自分が彼を有名にしたいと思うような女性。

ひとつの母性本能のようなものだろう。

数年して彼と再会したことがあったが、彼にそのような女性ができていた、

なぜ僕にその女性を紹介したのか、彼としては自慢しかったのだろう。

彼の女性アプローチ方法は独特だった。

これは僕には披露はしなかったが、彼を観察しているとわかってきた。恥ずかしいけど、僕はどうすれな女性にモテるかというのはひとつのテーマだった。小説や映画でも学べるが、生きた教材から学ぶのが一番だった。僕は中学生時代からプレイボーイと呼ばれた男の観察していたものだ。

妻夫木ギタリストはクラブに彼の好みの女性客が来ると彼女から名前だけ聞くようだ、その時に電話番号は聞かない。そしてバンドの休憩中に、クラブを出て外から電話をする。つまりお店にいる女性を呼び出すわけだ。お互いに面と向かってデートを約束するのは意外に恥ずかしいものだ。

電話の方が円滑に進むようだ。

僕は彼の後姿だけで、これから外に出て電話するのがわかるようになって、誰に電話があるのか、僕はクラブにいて、呼び出された女性を知ることになる。

その後の彼女の様子なんか観察するのも面白かった。決勝前のオリンピック選手を見るような感じがあった。

彼の恋愛における方針演説を聞いたことがある。

彼女か彼の、どちらかの部屋に、はじめて行く時が肝心だという。

部屋に入ると、いきなり奇襲、真珠湾攻撃だ。

女性の方もいきなりで、あれよあれよという感じだそうだ。

これが部屋について、お互いに一服すると、意外にしらけてしまうことはある。

彼はいつもイキナリが重要だと言っていた。

僕には、できないけど。

これは彼が本当はとてもシャイだというあらわれだろう。

じつくりと将棋のように詰めていくか、

果実が熟して相手から落ちてくるのを待つようなプロセスを楽しまないタイプのようだ。

プレイボーイも卓球の選手のように、

ひたすら攻めるタイプと

ひたすら守って相手の自滅を待つタイプがある。

中学の時にあこがれたプレイボーイは

そのプロセスを楽しむのが醍醐味だと言っていた。

その点妻夫木ギタリストは根っからのプレイボーイではないと思った。

ハウンド・ドッグ

2月の「ブロウハウス」は、
僕らのバンドとイギリス人バンドの1日での交代制。

1時間おきにバンドチャンジされる。

ある日イギリス人バンドのメンバーが英語で僕に言ってきた。

「君のは小さいキーボードだから、これを弾いていい」

彼らのキーボードはハモンドオルガンとレスリースピーカーだった。

その頃の最高峰とも言うべき組み合わせで、
やはりキーボードはテクニクも大事だが名器だと音がゴージャス
になるし、

腕が抜群に上がったように錯覚してしまう。

つくづく思ったことはキーボードは楽器に随分左右されることだ。

レスリーには小さい扇風機がついていて風で波のような流れる音になる。

僕に言わせると「シュワシュワ」と、うなりながら音が出てくる
感じで、

「青い影」の演奏には非常に効果的だった。

ステージに2台もキーボードを置くスペースがなかったことも理由

だろう。

イギリス人は合理的だ。

ちなみに僕のキーボードは丸井のローンで購入したヤマハ製だった。

イギリス人バンドは世界的にヒットした『Happy Together』を歌った。

彼らは歌うとき片言の日本語で紹介した。

「みなさん、この曲は、わたしたちがうつくつた曲です」

この曲は「タートルズ」で大ヒットしたもので、

彼らが「タートルズ」のなれのはてだったかもしれない。

バンマス（リーダー）はドラムのジョージだが、人の良い親爺だ。

影のリーダーはボーカル石立だった。

彼は初日の音出しで号令をかけた。

最初の三日が勝負だ、緊張して演奏しろ。

人は最初で評価されてしまう。

最初が悪いと、翌日から良くなっても最初の印象は払拭できない。

これは会社勤めでも同様だ。

初出社する時は、初日がすべてである。

いきなり初日に遅刻すると、その後は無遅刻でも、

遅刻する男というイメージを払拭するには半年以上かかるだろう。

ボーカル石立は演奏スタイルでも指示を与えた。

踊りを盛り上げるために、曲と曲の間は途切れず連続演奏することだ。

5つくらい連続演奏のパターンを決めていて、

どのパターンで演奏するかはボーカル石立が指で指示した。

彼はオリジナルの曲でなくて、

必ず他のミュージシャンがカバーした曲を採用した。

例えばビートルズの『ヘイジュード』、

ウィルソン・ピケットがカバーした曲で演奏した。

アレンジがなされているので、ちょっと違った曲に聞こえた。

日本有数なクラブ「ブロウハウス」とのバンド契約は1ヶ月だった。

それがボーカル石立の功績で、契約が1ヶ月延長となった。

クラブの支配人が踊っている時に、

支配人がプレスリーの曲で踊りたいなあとひとつつぶやいた。

ボーカル石立は見逃さなかった。

言われたその日だった。

次の演奏時間に『ハウンド・ドッグ』を歌った。

エルヴィス・プレスリーの大ヒット曲だ。

『ハウンド・ドッグ』は「H o u n d D o g」とスペルして、

俗語で「口だけは達者な奴」とか「女たらし」の意未。

大友を中心とするロックバンド名の由来も、この曲からだそうだ。

すぐに演奏できた。

問題はボーカル石立がどのキーで歌うかだけなのだ。

僕らには出だしのコードが伝えられたただけだ。

初期のロック曲なので、すぐ対応できた。

支配人は、まるで子供のようにはいしゃいで踊っていた。

アンコールもされたと記憶している。

その日クラブ配給の夕食は、珍しくステーキで、シャンパンが飲めた。

契約延長だが妻夫木ギタリストは、二月末で他のバンドへ移っていた。

このバンドでは彼の好きな曲が演奏できないという理由らしい。

たしかにバンドの曲はボーカル石立の選曲が中心で、

ジェームスブラウン・W A Rなどのヘビーなソウルの曲が多かった。

ダヒルサヨ

妻夫木の交代ギタリストがやってきた。

バンドボーイにギターとマーシャルアンプを運ばせての登場だ。

彼は事務所の指示で一ヶ月の、どき回りにやってきたと言った。

髪はサラリーマン風、長髪の妻夫木とは対照的だった。

野球のイチロウ選手のように、毎日演奏前に入念な調弦を行った。

爪弾く音だけで、この弦が切れる寸前かわかるそうで、

演奏途中に弦が切れるのはありえないと豪語していた。

僕は彼の名前を忘れた。

彼が好きな『マーシー・マーシー・マーシー』を弾いていたことを覚えてる。

そして彼のごだわりは単にコードを押さえるのではなくて、

例えばFだったらそこをF6、F7とかで弾くのが主義だと言っていた。

僕のひと月のギャラは住んでいた高田馬場のマンション家賃の約4倍だった。

この時代のディスコクラブは生バンドが主流で、

日本人バンドから、人件費の安いフィリピン人バンドに移行していた。

しかし数年もたたないうちに、生バンド時代は終わりDJの時代となる。

3月の「ブロウハウス」は、僕らのバンドとフィリピン人バンドであつた。

フィリピン人のバンドマンは楽譜が読めない者が多いと聞いていた。

ギターを多少弾ける僕は、彼らのギターのコードの抑え方が奇妙でならなかった。

不思議な音を出す。

普通のコードでは弾いていない、コードの押さえ方が変なのである。

開放弦でもない、全部の弦を弾いていない。

彼らはレコードから聞いた音をギターを弾いてさぐりながら音を決めているようだった。

フィリピン人バンドの公用語は英語で、日本語は片言しか話せなかった。

僕らに話しかけることはなかった。

なにか僕らを怖がっているようにも思えた。

バンド交代の時に、お決まりのバンドチェンジの曲を弾いた。

昨年の秋から、この楽譜もなく題名も知らない曲が伝えられていた。

交代時のフィリピンバンドが「ダヒルサヨ」と歌った。

調べたら『D a h i l S a I y o』ダヒルサヨというフィリピンの国歌だった。

フィリピンの母国語（タガログ語）で「貴方ゆえに」という意味だそうだ。

この国歌は英語ではなく母国語で歌われている。

なかなか覚えやすいメロディで、切なくてしっとりとした曲だ。

ダヒルサヨが、その当時一般的なバンドチェンジ曲になったのは

日本の生演奏業界にフィリピンバンドが進出したあらわれかもしれない。

こうして何もなく、クラブでの仕事は三月末で契約を終えた。

18歳で上京して、約1年が経っていた。

ずっとバイトしどおしだった。

失恋もあったが毎日が夢のようで東京にいただけで幸せだと思った。

三番目のバンド

田中氏が次の仕事を紹介してきた。

僕は、ためらわずに行くことにした。

キーボード奏者は他のパートより圧倒的に数が足りないのだ。

4月からの仕事はふたつの店をかけもちするハードなものだった。

夕方は横浜伊勢崎町のクラブ、そして深夜1時から池袋のクラブでの音出しだった。

僕は両方のクラブでピアノを弾いた。

横浜から池袋まで、毎日ギタリストの車で移動した。

ヴォーカルはムード歌手の辺里。

おそらく出したレコードはヒットはしていないと思う。

メンバーはドラム、ベース、ギターそして僕。

クラブといってもディスコクラブではなく、ナイトクラブだった。

店にはちょっとした踊り場があるが、

そこでは社交ダンスが主流で、ソウルとは遠く離れたものだった。

仕事だからと割り切ったが演奏する曲は歌謡曲が主体でやる気をつくした。

辺里は歌がうまかったが、美男ではなかった。

「爪」とか「時計」とか歌謡曲にも良い曲があることを知った。

しかし初見ができないのに、曲のイントロを任された。

次から次に辺里が楽譜を持ってくるがすぐに対応できなかった。

辺里のはからいだったか？

楽屋ではピアノで辺里がつきつきりで猛練習した。

4月の中旬に、店をかけもちする理由が発覚した。

辺里が多額な借金をして、事務所がダブルの仕事を入れたのだ。

これを知ったギタリストが組合「ジャズユニオン」に訴える、

4月末で降りると激怒してしまった。

このバンドは1ヶ月しか、もたなかった。

最終話

次の仕事は都内Yホテルラウンジでの専属演奏だった。

バンドメンバーは女性ボーカルと

フルート兼パーカッション（バンマス）、ギター、ベース、ドラム。

ペトロ・アンド・カプリシャスのようなバンドを志向していた。

彼女も高橋真梨子風にしていた。

曲はカーペンターズのナンバーが多かったけど。

週一、このホテルラウンジでは有名な歌手のショータイムがあった。

NHK紅白歌合戦に昔出演した歌手が来た。

バンド休憩室では、歌手の方と直に話すことができた。

そのショータイムで、キーボード奏者が僕のキーボードを使わせてくれと言う。

「君、このボードさ、スミスのアドリブできる？」

「いえ、無理です。鍵盤が足りないです」

「うーん」と困った顔をしていた。

自前でキーボードをもってこないで、僕のキーボードを使った罰だ。

演奏していて鍵盤から指が横に、はみ出していた。

スミスというのはジャズ・オルガン巨匠のジミー・スミスだ。

客は20時頃から来るが多かった。

18時から音出ししているが無人の客席は、気が抜けるものがあった。

バンマスは新たな曲の練習になると喜んでいたが。

客は静かに聴くだけだった。

ソウルの曲で、客が盛り上がって踊るシーンがなつかしい。

今年の12月からバンドをはじめて半年、ほとんど自由な時間はなかった。

僕はふとバンドの仕事をやめたいと思った。

ゆっくりしたかった。

そう思うと思いが一気に加速していった。

それに大学にもほとんど行っていないので不安になってきた。

僕のバンドへの気持ちは急激に冷めていった。

このままバンドを続けても夢がないことも理由としてあった。

あのボーカル石立のレコードジャケットを見た時を思い出した。

もし間違って少々僕が有名になっても、ボーカル石立までは行かないだろう。

僕はミュージシャンとして大成はしない、素質がない、行く末を悟ったのだ。

バンドマンから足を洗おうと思った。

ヒット曲を出しても、その後生活できないで困窮するのがほとんどで、

スターになるのはほんの一握りの世界だと思った。

しかし交代のキーボードが見つからず、5月末まで仕事をあがることができなかった。

6月からは学生生活に戻った。

半年の夜勤は重症の不眠症を残し14時頃まで起きられなかった。

これでバンド編は終わるが、バンドは社会人になって再開することになる。

そのバンドは10年以上に渡って続くことになる。

僕のノルウェイの森は「アンナ姉貴編」に続く。

最終話（後書き）

テキストA4版（28ページ）を用意しています。

ご入用は77hikoboshi@gmail.comへ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0534n/>

自伝僕のノルウェイの森（大学時代バンドの思い出）

2011年11月15日18時15分発行